

# マイブんだより

平成25年5月22日 第10号

発行 都城市教育委員会事務局

文化財課

## ○ 文化財課の仕事

これまでの「マイブんだより」は、文字どおり埋蔵文化財の事業を中心に話を進めてきました。ここで少し寄り道をして、みなさんが知りたい(?)文化財課のお仕事を、お教えしましょう。

文化財課は、教育委員会に所属し、文化財に関する業務を行っています。担当は二つに分かれ、埋蔵文化財担当と一般文化財担当があります。昨年度まで、埋蔵文化財担当は5人でしたが、これから大規模開発等による発掘調査を予定しているため、新規採用職員が2人増えて7人になりました。全員が考古学の専門なので、発掘調査や報告書作成、遺物実測(大きさ、形を記録するための計測)等のスキルの継承ができるので、大変うれしく思っています。しかし、一人で大規模な調査を担当するのは大変です。このため、ほかに埋蔵文化財専門の嘱託職員が3人います。この10人で、発掘調査や9号まで掲載した埋文活用事業等様々な業務を行っています。また、出土した膨大な量の遺物を水洗いし、整理し、実測、復元作業等を行うパートのみなさんがいます。



文化財課庁舎(菖蒲原町19-1)

一般文化財は、副課長ほか2人の3人体制ですが、埋文と同じように歴史系の専門を含む2人と歴史資料館に4人の嘱託職員がいます。この9人で文化財課全体の事務、歴史資料館の管理運営、文化財・史跡等調査や住民からの歴史的な問い合わせ対応などを行っています。守備範囲が多岐にわたり、猫の手も借りたいほどです。当課の場合、一般文化財という名称は大きな括りで、考古学以外の歴史(文献史学)、民俗、美術、工芸、自然科学、地質などがその範疇に入ります。大きな博物館には、それぞれ専門の学芸員が存在します。しかし、当課では専門の学芸員資格を有する職員は、歴史が1人です。民俗と美術、工芸は何とかこなしていますが、自然科学と地質はお手上げです。とはいえ、国指定の天然記念物「関



墓石調査中の担当者。石に書かれた文字を読むと、安土桃山時代のものがありました

之尾甌穴群」と県・市指定の植物があるので、文化財保護審議会委員の専門の先生の力を借りて対応しています。やらなければならない仕事がたくさんある一般文化財ですが、詳しくは次の機会に。

墓石調査中の担当者。石に書かれた文字を読むと、安土桃山時代のものがありました

## ○ どうやって史実がわかるのかな?

前回の9号で、出土した遺物等の道具類の特徴により時代を推定していることを少しお話しし

た。しかし、これだけでは史実はわかりません。その頃の文書でわかるのでは、と思われる人もあるでしょう。

日本で漢字が使われ始めたのは5世紀の古墳時代です。また、紙が伝わり使われ始めたのも6世紀くらいからです。しかし、最初からみんなが文字を書けて、紙が使えたわけではありません。ごく一部の身分の高い人たちだけで、一般的に普及するまでには時間がかかっています。文字はあっても紙がなければ記録できません。では、紙が伝わるまでは何に書いていたのでしょうか。それまでは、木簡もつかん（木を削って作った薄く細長い板）に書いていたのです。奈良・平安時代の中心だった奈良や京都には、



たくさんおしまはの木簡や文書が残っています。また、大きな遺跡、地方の中心地であったところでは、木簡が

願文（永享12年・1440年）室町幕府の跡継ぎ争いに敗れた大覚寺義昭（4代将軍義持の弟）が、日向に逃れ、神柱宮に勝利の願を立てたもの

たくさんおしまはの木簡や文書が残っています。また、大きな遺跡、地方の中心地であったところでは、木簡が

出土したところもあります。しかし、勢力争いの中で支配者が代わってゆく地方では、支配の記録そのものも残っていることが少ないのです。

都城では、木簡は出土していませんが、文字の書かれた土器や茶碗は、大島畠田遺跡みなもとぼうなどからも出土しています。都城に現存する文字が書かれた一番古い文書は、都城島津家文書の中の「源某くだしぶみあん下文書」で、久壽2年（1155年）のもので、この時代から後は、この都城島津家文書や島津家文書しまづけもんじよ（国宝・東京大学史料編纂所蔵）などで、少しずつ歴史をひも解くことができます。しかし、それですべてがわかるわけではありません。文書の中の建物の位置や大きさなどが、発掘調査で検証できることもあるのです。このように、文書

等の文字や絵図等の資料と発掘調査はお互いに補完しあい、歴史を史実として公にできるのです。文字資料がない古い時代は発掘調査によって出土した遺跡や遺物により、その時代をそして生活の様子などを解き明かしていかなければなりません。ひとつの遺跡の出土品は、すべてが歴史を物語る資料となるわけではありません。たくさんおしまはの発掘現場から出土した資料をつなぎ合わせて、発見された地層の年代を特定し、歴史を形作っていくのです。これまでの、考古学者を始め多くの研究者の努力の上に今の考古学と歴史があります。



薩摩迫居館跡（山田町古江）近年の発掘調査の結果、絵図とほとんど変わらない遺構（城跡）が確認され、良好な状態で残っていると思われます

こうした発掘調査の成果や文字の資料等により、その地域にどんな歴史があり、どんな人たちが暮らし、どんなまちだったのかなどが徐々に明らかになっていくのです。これは、地域の生い立ちや伝統・文化などアイデンティティを表しています。現代のまちづくりにもこの歴史を知り、それを生かしていく必要があるのではないのでしょうか。

開発の対極にある発掘調査、なぜ必要なのか少しわかっていただけただけでしょうか。